

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 28 日現在

機関番号：33915

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04259

研究課題名(和文) サービス・ラーニングによって獲得する能力の評価指標の開発と学修効果の検証

研究課題名(英文) Development of the evaluation items of the abilities obtained from the service learning and validation of the learning effect.

研究代表者

白井 靖敏 (Shirai, Yasutoshi)

名古屋女子大学・家政学部・教授

研究者番号：20267925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学生が実社会へ出て直接的に役立つ能力として、社会人基礎力を身に付ける意味においても重要なサービス・ラーニング(社会貢献学習)を取り上げた。そこで獲得するジェネリックスキルズ(汎用力)を評価する評価者用ルーブリックと学生用の学修ポートフォリオを開発し、高田短期大学および名古屋女子大学短期大学部において3年間の実践研究および検証を行った。結果、当初設定した6能力22項目から汎用性の高い5能力8項目の共通ルーブリックと、それを用いた学修ポートフォリオが作成でき、その効果が実証できた。また、大学教員による評価に加え、学生の活動に関わる地域スタッフによる負担の少ない評価方法も確認できた。

研究成果の概要(英文)：As a subject of our research we chose the service learning which enables students acquire generic skills immediately useful in real life. We have developed a learning portfolio for students and a rubric for evaluators who evaluate generic skills which are important in terms of fundamental competence for working persons. We have selected 8 items in 5 abilities out of 22 items in 6 abilities and decided a general-purpose common rubric and a learning portfolio after the practical research for 3 years and its verification at Takada Junior College and College of Nagoya Women's University. These evaluation methods proved to be less burdensome for the community-level volunteers involved in student activities as well as for the faculty of University.

研究分野：教育工学

キーワード：ルーブリック 学修ポートフォリオ サービスラーニング 評価規準 評価基準 評価方法

### 1. 研究開始当初の背景

すでにユニバーサル段階にある大学等の高等教育では、これまでも増して、多様な学生を受け入れている。こうした状況のなかには、一斉型の講義だけでは集中力が持続できず、学習内容が十分定着していない学生も多いため、授業方法などに様々な工夫がなされている。また、考える力やコミュニケーション力など、自ら学ぶ態度を育てるための工夫として、様々なアクティブラーニングの手法が取り入れられてきている。本研究グループでは、企業研修などで多く取り入れられ、有効とされるファシリテーターを大学の授業でのグループ学習に導入することで、グループ学習の活性化を図ってきた。グループ学習等のアクティブラーニングでは、単に知識・理解だけではなく、多面的な学力が身に付くことから、今後も大学等の高等教育機関で多く取り入れられていくことは疑う余地がない。本研究では、アクティブラーニングのひとつの手法でもあるサービス・ラーニング(社会貢献学習)を取り上げ、教室で得た知識と社会実践をリンクさせる重要な役割を果たすとともに、学生が実社会へ出て、直接的に役立つ能力として、社会人基礎力を身に付ける意味においても重要でありながら、その授業設計、効果測定には改善課題も多い。こうした学習は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力(社会人基礎力:経済産業省)を育てるに最も適した学習方法でもあるので、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)を含む能力評価規準および基準を開発することが、効果測定にとって重要と考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究グループが、これまで実践研究をしてきたグループ学習において、ファシリテーションスキルの導入とファシリテーターの役割を明確化したことにより学習の深化、広がり、学生の学修満足度などの点で成果を得た。これらの研究成果をもとに、サービス・ラーニング(社会貢献学習)において学生のジェネリックスキルズ(汎用力)の獲得に焦点をあて、その能力評価規準および基準を開発する。さらに、サービス・ラーニングの学習デザイン(学生による企画、運営、省察)から学習評価指標による評価、単位認定に至る一連のサービス・ラーニングの学修支援システムを構築し、その実効ある実践的な教育方法を研究することを目的とする。

### 3. 研究の方法

1年目は、従前より実施している高田短期大学(アクティブラーニングを取り入れた情報ボランティア育成講座)と名古屋女子大学短期大学部(地域貢献演習)の教育実践のなかでの問題点、課題などを抽出するとともに、諸外国および我が国の大学でのサービス・ラ

ーニングの状況を調査研究する。そして、サービス・ラーニングにおいて学生が獲得可能なジェネリックスキルズ(汎用力)を評価する評価規準・基準(ループリック)を開発する。2年目は、サービス・ラーニングの学習デザイン(学生による企画、運営、省察)、学習評価規準・基準による評価、単位認定に至る一連のサービス・ラーニングの学修支援システムの構築を行い、これに基づいた実践研究を行うとともに、ループリックや学修ポートフォリオの内容を精査し、より汎用的な規準・基準とする。3年目は、前年度の実践の効果を検証し、学習デザイン、ループリックや学修ポートフォリオを改善し、再度、実践検証を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 概要

平成27(2015)年度では、学生に求める汎用力を、OECDのキー・コンピテンシー、経済産業省の社会人基礎力(3能力12要素)、文部科学省の学士力(4分野13項目)を参考に、サービス・ラーニングで獲得し得る項目を想定し、評価項目ごとの重要度を、学生へのアンケート調査、および、地域団体、ボランティア協働団体のスタッフ、サービスを楽しむ参加者へのアンケート調査結果分析により策定した。項目毎の重要度を考慮した評価者用ループリック(6能力22項目)と学生用の学修ポートフォリオを開発し、これらを使った実践(高田短期大学では平成27(2015)年12月と平成28(2016)年3月、名古屋女子大学短期大学部では平成28(2016)年1月)を行った。これらの結果から活動内容の異なる2つの実践をもとに、ボランティア協働団体のスタッフ、指導教員、学生自身が評価できていた項目を精査し、そこから共通する項目を抽出しコモンループリック(6能力14項目)を試作した。このコモンループリックおよびこれを用いた学生用の学修ポートフォリオを使った検証実践を、高田短期大学では平成28(2016)年7月および12月と平成29(2017)年3月、名古屋女子大学短期大学部では平成30(2017)年1月)を行った。

#### (2) コモンループリックによる評価

高田短期大学における実践から、平成27(2015)年度のアンケート調査により得られた結果から設定した項目ごとの「重み」のうち4点満点中3点以上の評価項目を抽出、平成27(2015)年度の実践(対象学生4人)から、半数以上の学生が評価できていた項目を抽出、平成28(2016)年度の実践(対象学生13人)から、3段階評価(Aを3点、Bを2点、Cを1点)の平均値が2点以上の評価項目を抽出、同様の実践より、半数以上の学生が評価できた評価項目を抽出した。また、名古屋女子大学短期大学部の実践から、高田短期大学の場合と同様、「重み」のうち4点満点中3点以上の評価項目を抽出、平成27(2015)年度の実践研究から29人の学生に

ついて、半数以上が評価できていた項目を抽出、平成 28(2016)年度の実践研究から 42 人の学生に対し、3 段階評価 (A を 3 点, B を 2 点, C を 1 点) の平均値が 2 点以上の評価項目を抽出した。ここでは指導教員 5 人が、担当する学生グループを評価しているが、それぞれの活動内容は異なる。

活動の異なるサービス・ラーニングにおいて、抽出した評価項目が共通しているものほど高位と考え、信頼度の高いコモループリックの評価項目として選び出すことができた。そうした場合は、これまでの研究を踏まえて、次の評価項目 (5 能力 8 項目) に絞ることができた (図 1)。これらの項目は、今後、活動の異なる様々なサービス・ラーニングにおける「汎用力」を評価するコアとなるものと考えられ、サービス・ラーニングの種類や活動内容によって、当初に設定した 22 項目から必要に応じてコア 8 項目に加え、ループリックを作成することができると考えられる。

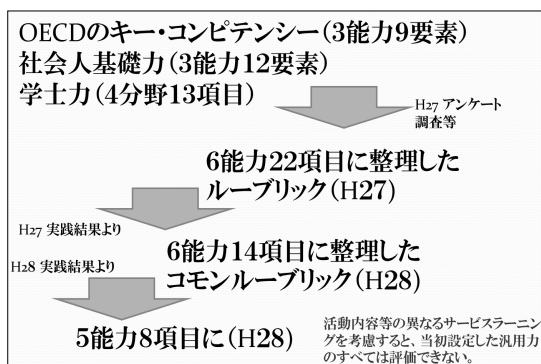


図 1 評価項目の精選に関する経緯

(3) 単位認定科目 (正課) を想定した評価に対する考え方

高田短期大学において、本実践に協力いただいたボランティア協働団体のスタッフにサービス・ラーニングの評価に対する考え方について聞いたところ、「大学内だけでなく、これからは、大いに学外に出て、地域貢献をしたり、様々なボランティア活動に参加したりすることで、学修意欲が向上すると考えられるので、この活動をサービス・ラーニングと位置づけ単位認定をしてあげるとよいと思う」が 6 人中 4 人であった。学生 13 人にも同様の質問をしたところ、「そう思う」が 13 人中 6 人となった。

サービス・ラーニングでの活動を単位認定科目 (正課) として位置づけることに賛成意見が多いわけではないが、実践を通してスタッフも学生も、そして、教員も、単位認定科目としての位置づけについて考えを深めることができたと考えている。少なくとも、汎用力に関し、評価項目や評価基準を明確にし、学修成果を明確に示すことができなければ正課として位置づけることができないと考えられる。

(4) 評価者による差異

ループリックは主観に陥りやすい評価を可能な限り評価基準を明確にし、数量化していく手法であるものの、それぞれの基準の表記はどうしても定性的な表現にならざるを得ない。そのため、できるだけ丁寧な説明を加え、評価者や学生にとって分かりやすいループリックや学修ポートフォリオにする必要があることから、実践を重ねながら改訂検討している。しかし、評価者は、これまでの経験などによって自身が持っている内在的な基準に違いがあり、固定した考え方などの影響は払拭できないと考えられるため、評価者による差異について、これまでの実践から検討する。平成 29(2017)3 月と平成 28(2016)年 12 月での自己評価の差、平成 28(2016)年 12 月での自己評価の事後と事前の差、平成 28(2016)年 12 月での教員評価とスタッフ評価の差、平成 29(2017)年 3 月での教員評価とスタッフ評価の差、平成 28(2016)年 12 月でのスタッフ評価と自己評価の差、平成 29(2017)年 3 月でのスタッフ評価と自己評価の差、平成 28(2016)年 12 月での教員評価と自己評価の差、平成 29(2017)年 3 月での教員評価と自己評価の差を比較すると、の差では、ほとんどの項目において 2 回目 (平成 29 年 3 月) の活動の方が高い傾向にある。特に差が大きい項目として、「分かりやすく説明できる力」「相手に応じた会話ができる能力」「情報を収集、加工、編集し分かりやすく表現する力」がある。これらは、活動を通して能力アップが自身のなかで感じられていることを示している。「状況を把握して柔軟に対応する力」の伸びも大きく、学外でのこうした活動があってこそ培われていく能力ではないかと考えられる。1 回目 (平成 28(2016)年 12 月) 事後事前では、全体としての差が小さく、自身の活動を振り返るなか、厳しめに評価した結果とも思われる。おそらく、初めての本格的な活動を、思ったほど「うまくいかなかった」と自己省察しているとも考えられる。「自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力」「他人と良い関係を作る」の事後評価が高いことでは、シニアの方から話しかけてくれ、話しやすい雰囲気を作ってくれる人が多かったことも影響していると思われる。教員による評価はスタッフによる評価をおおむね上回っているものの、バラツキが大きく、スタッフが評価そのものに慣れていないため、ループリックを見つても、基準が定まっていなかったと考えられる。後のアンケートにも「ループリックが分かりにくい」などの意見も寄せられている。2 回目 (平成 29(2017)年 3 月) になると、対象が同じ学生でもあり、評価項目も同じであることから、「見る目」がある程度定まってきたと考えられ、教員の評価との差におけるバラツキも小さくなっている。全体としては教員の方がやや辛めである。でみられるスタッフと学生の自己評価では、学生の方がやや辛めである。特に、

2 回目の活動では、学生が講師として前に出ることがないため、評価を十分にできなかった可能性があった。でみられる教員による評価でも学生の方がやや辛めになっている。1 回目では、初めての講師役で準備したのに、予定通りできなかった思いがあったと思われるが、2 回目の評価ではやや教員の評価に近くなっている。学生も評価基準を理解し、12 月の活動ののち、教員やスタッフからの評価を受け取っており、評価力がついてきていると考えられる。また、教員評価が研究者評価と相関があることから、日常的に学生の学修を観察し評価経験が多い教員評価は適切であったと考えて良い(表 1)。

表 1 評価項目に対する相関

2016.12 相関係数	
自己評価と教員評価	0.16
自己評価とスタッフ評価	-0.11
教員評価とスタッフ評価	-0.56
2017.3	
自己評価と教員評価	0.53
自己評価とスタッフ評価	0.83
教員評価とスタッフ評価	0.57
自己評価と研究者評価	-0.11
研究者評価と教員評価	0.53
研究者評価とスタッフ評価	0.03
自己評価 2016.12と2017.3	0.40
教員評価 2016.12と2017.3	0.52
スタッフ評価 2016.12と2017.3	-0.52
13人の学生に対する相関	
相関係数	
自己評価と教員評価 2016.12	-0.80
自己評価と教員評価 2017.3	0.30
自己評価と研究者評価 2017.3	0.23
教員評価と研究者評価 2017.3	0.53
スタッフ評価と教員評価 2016.12	0.35
スタッフ評価と教員評価 2017.3	0.48
自己の事前評価と事後評価 2016.12	0.39

逆相関が比較的強い結果

#### (5) 学生の自己評価と担当教員の評価との相関

表 1 の学生の自己評価と担当教員の評価との相関をみると、活動当初は自分に厳しい(自己評価が低い)学生は概して教員による評価は高く、逆相関を示している。ところが、教員やスタッフからの評価を受け、自己評価と照合するなど、自己を振り返ったあと、3 月の 2 回目の活動では、相関は高くないものの学生の自己評価と教員による評価傾向は、おおむね一致してきている。この結果について、14 項目ごとの学生評価の平均と教員の評価平均をプロットすると(図 2)、2 回目の方が正の近似直線に近いところに分布が変化していることが分かる。図 3 は、13 名の自己評価の各平均と教員の学生評価の平均とをプロットしたものであり、先にも述べたが、1 回目に強い逆相関が正の相関に変化して

いることは、学生個々に見れば、自分の中で各評価項目の評価は正しく行えていたが、自分の基準を高くする傾向のある学生、低くする傾向のある学生がいることを意味する。学生自身の持っている評価基準が、教員などの他者からの評価を受けることにより変化したと考えられる。ただし、他者からの評価基準が影響したのか、学生自身の評価基準が定まって、より客観的に自分を見ることができるようになったかについては、次の実践で検討する。

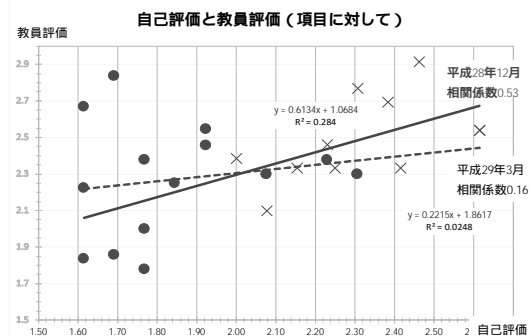


図 2 自己評価と教員評価(評価項目に対する分布)

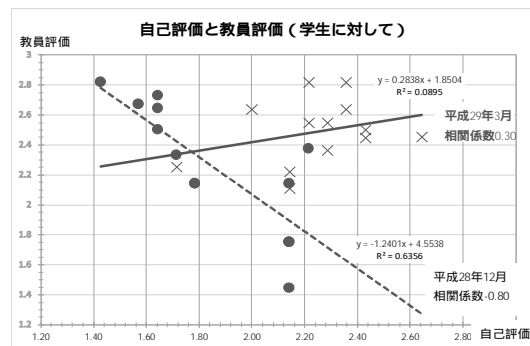


図 3 自己評価と教員評価(学生に対する分布)

#### (6) 自己分析と評価結果の妥当性

学生には、学修ポートフォリオとして自分の成長を確認できるように自己分析シートを毎回記載させている。活動の異なる名古屋女子大学短期大学部でも同じ自己分析シートで振り返りをしている。両短期大学において、16 項目の自己の振り返り項目に強い相関があった( $r=0.79$ )。このことは、学生の学びの目的と自己省察においては、サービス・ラーニングでの活動内容の違いは、あまり影響しない、すなわち、どのような活動であっても汎用力を獲得する学修目的は達成可能であることが分かる。

学生の評価とボランティア協働団体のスタッフ評価は、評価活動が繰り返されることで評価結果が安定していった。しかし、学生やスタッフなどの評価者自身が持っている基準の違いが初回に大きく現れた。ループリックは、質的な評価を数量化する機能を持つものの、評価者自身が過去の経験などにより、ある意味固定した基準が影響していくので、可能な限り、だれでも同じ基準として考えられるループリックの記述語の工夫が必要であることが示された。

#### (7)まとめ

本実践において、高田短期大学は非正課の活動、名古屋女子大学短期大学部では正課の授業としている。それぞれの活動(授業)内容は異なり指導状況も異なる。学生は大学で学んだ知識や技術を地域に貢献し、その見返りに、いわゆる汎用力(ジェネリックスキルズ)の向上を図ることができた。

サービス・ラーニングの学修成果を測る場合、つまり、正課の授業と考えたときの成績評価は、汎用力がどれだけ向上したかを見るのが中心と考えている。もちろん、学生自身が自己の振り返りとして、大学で学んだ知識や技術をどれだけ地域に貢献し得たかを自己省察することも合わせてのことである。汎用力を評価すること、これは、主観の入りやすい質的な評価を可能な限り数量化していく手法が重要となる。そのひとつとしてルーブリックや学修ポートフォリオが有用と考えられる。研究の手始めとして評価項目を、OECDのキー・コンピテンシー、社会人基礎力(3能力12要素)、学士力(4分野13項目)を参考に、サービス・ラーニングで向上が図れる22項目にまとめ、地域スタッフや学生、教員からのアンケート調査から項目ごとの重要度を策定し、実際の評価を実施するなかで検討を加え、最も重要となるルーブリックを開発し、2つの短期大学部の3年間の実践結果を総合的な観点から精選していき、研究最終年度の実践で検証し、いわゆるコモンスルーブリックの基礎となるものが作成できた。それは、以下の5能力8項目である。

文化技術等を相互作用的に活用する能力

- ・分かりやすく説明する力
- ・相手に応じた話ができる能力(会話力)
- ・傾聴する能力(話を聞こうとする姿勢)
- 人間関係形成調整能力
- ・他人と一緒に協力して活動ができる力
- ・他人と良い関係を作る力
- 自律的に行動する能力
- ・活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力

前に踏み出す力

- ・自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力

チームで働く力

- ・規律などを遵守する力(約束ごとなどを守るなど)

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 8件)

(1)白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける学修成果の可視化に向けた取組, 名古屋女子大学 紀要 第62号 pp141-151 2016

(2)鷺尾敦, サービス・ラーニングで発揮される専門能力を評価するルーブリックの開発 - 「シニアパソコン教室」の調査から -, 高田短期大学 紀要 第34号 pp91-102 2016

(3)白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける COMMON RUBRIC の検討,

名古屋女子大学 紀要 第63号 pp75-87, 2017

(4)鷺尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングにおけるルーブリック評価手法と学修ポートフォリオの改善, 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報 第3号 pp.73-83 2017

(5)三宅元子, 白井靖敏, 学修ポートフォリオの導入と検証, 名古屋女子大学 紀要 第63号, pp89-100, 2017

(6)白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける COMMON RUBRIC の有効性, 名古屋女子大学 紀要 第64号, pp97-408, 2018

(7)三宅元子, 白井靖敏, 安井健, 学修ポートフォリオ二年目の比較検討, 名古屋女子大学 紀要 第64号, pp409-417, 2018

(8)鷺尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングでの利用を目指したルーブリック評価の実践と課題, 高田短期大学 紀要 第36号 pp41-52 2018

[学会発表](計 6件)

(1)鷺尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングによる学修評価指標の検討, 日本教育工学会第31回全国大会(電気通信大学), 大会論文集 pp809-811, 2015.9

(2)白井靖敏, 鷺尾敦, サービスラーニングにおける汎用力評価の実践的検討, 日本教育工学会第32回全国大会(大阪大学), 大会論文集 pp821-822, 2016.9

(3)三宅元子, 白井靖敏, 大学の消費者教育に導入するルーブリック評価の提案(ポスター), 日本家政学会第69回研究発表大会(奈良女子大学), 大会要旨集 pp99, 2017.5

(4)三宅元子, 白井靖敏, 学修ポートフォリオ導入の現状と学生の意識, 日本教育工学会第33回全国大会(島根大学)大会論文集 pp107-109, 2017.9

(5)鷺尾敦, 白井靖敏, 原田妙子, サービスラーニングにおける「汎用力」の評価結果の考察, 日本教育工学会第33回全国大会(島根大学)大会論文集 pp971-972, 2017.9

(6)白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける「汎用力」を評価するコモンスルーブリックの実践的考察, 日本教育工学会第33回全国大会(島根大学)大会論文集 ppP973-974, 2017.9

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

白井靖敏(SHIRAI, Yasutoshi)

名古屋女子大学・家政学部・教授

研究者番号: 20267925

##### (2)研究分担者

鷺尾敦(WASHIO, Atsushi)

高田短期大学・キャリア育成学科・教授

研究者番号: 30259379

原田妙子(HARADA, Taeko)

名古屋女子大学短期大学部・生活学科・教授

研究者番号: 40238184